

第9 部会

れている。このことは会話文の中においても同様である。⑦成道後の釈尊に初めて会った時の五比丘の釈尊への呼び掛けは「汝」「瞿曇」という表現である。「五比丘遙見世尊來。各各相誠救言。此瞿曇沙門。行不著路迷荒失志。若來至此。汝等莫與言語。亦莫禮敬。更別施小座令坐。」(T. 22, 787c) 五比丘の「汝」「瞿曇」の使用に対し、釈尊はこの語で以て自身に呼び掛けることを禁止される。「五比丘見如來坐已。皆稱名汝如來。時佛告五比丘言。汝等莫稱名汝如來。至真等正覺。如來威神無量最勝。汝若稱名汝如來。長夜受苦無量。」(T. 22, 787c) 仏陀となった釈尊に対し不適切であると。

三、釈尊の出家の描写については鬚髪を剃り、袈裟を著し、家を出て、鉢を持ち乞食するとある。これは正しく受戒する時に必要な条件である。釈尊はここで比丘となったと言ってよからう。従ってこの時点以降の地の文は釈尊を示すのに「菩薩」ではなく、「比丘」と表記するのが妥当であろうが、そのようにはなっていない。

むすび

出家すると同時に比丘になったと見なすことが自然と思われるけれども、律藏の立場からは、比丘から仏陀になるとするとは何か不都合なことがあるのかもしれない。比丘が修行しても仏陀になることは不可能であり、ただ菩薩のみが可能である、という前提があるかと思われる。そうであるならば地の文の「菩薩」と名(幼名)の「菩薩」とは質的に区別されるべきであろう。他の諸律の検討により解決の手掛かりが得られるであろう。

吉蔵と『撰大乘論』

藤野泰二

本稿は、吉蔵(五四九—六二三)の『撰大乘論』に対する扱い及び著作中における『撰大乘論』の引用の調査とその理解について、仏身論の問題と絡めて考察したものである。

吉蔵の著作中における『撰大乘論』の引用を調べると、明確に書名を挙げて『撰大乘論』を引用・関説している箇所が見られたのは現存二六部のうち一七部である。『撰大乘論』を用・関説している回数、『法華玄論』四九回、『勝鬘寶窟』二七回、『中觀論疏』二六回、『法華論疏』二四回、『法華統略』一八回、『法華義疏』一五回、『大乘玄論』一三回、『百論疏』九回、『浄名玄論』八回、『十二門論疏』六回、『維摩經義疏』三回、『法華遊意』二回、『三論玄義』一回、『仁王般若經疏』一回、『金剛般若經疏』一回、『觀無量壽經義疏』一回、『維摩經略疏』一回であり、総数は二〇五回である。

次に、吉蔵の仏身論について、特に法身と応身との関係について考察する。吉蔵の仏身論の特徴として挙げられるのは、吉蔵が經・論において説かれる仏身論をまとめあげようとする態度である。吉蔵は当時までに現れていたさまざまな仏身論の教説を収集し、それらを会通しようとして努力している。そのため多くの經・論の引用をなし、それぞれの仏身論を併記する。吉蔵は『法華玄論』において諸經・論の仏身論(二身説・三身説・

四身説)を合本合迹・開本開迹・開本合迹・開迹合本の四種類にまとめ、そのうち『撰大乘論』については開迹合本とする。ただ、吉蔵は同じく世親の釈となる『法華論』・『十地経論』を開本合迹としており、両者を会通して、応身に「亦自亦化他」の徳を持たせている。吉蔵のこのような理解は、吉蔵の仏身論において特徴的とされる応身を二つに分ける内応・外応の考えに繋がると考えられる。内応とは仏性が顕われたもの(如如境・自照)であり、法身と相応したものである。また、外応とは菩薩を教化するもの(如如智・覚他)である。

吉蔵の理解した法身とはどのようなものであったか。吉蔵は法身を性空、寂滅、実相の異名として考えており、実相については「故知。假名宛然而即是實相也。」(T42, 126c)と述べている。この吉蔵にとつての実相とは仮名を通じたものであり、仮名を超越した何物かなのではない。もし応身に法身としての意義を持たせると応身は本身にして迹身でもあるということになるが、この本・迹については、「若離陰有佛人法則並便不相成。本迹亦爾。」(T42, 141b)と述べ、また僧肇の「本迹雖殊。不思議一。」・「豈近捨丈六。遠求法身者哉。」という言葉を用いし(T37, 15a)、「本身と迹身は別次元に存在するようなものではなく、迹身のはたらきの中に顕われるものなのである」と述べている。また、衆生は法身とは「百非を超え四句を絶す」ものだとして法身と衆生とが隔絶されたものであるとの考えを起こしてしまうが、そうではないのだと説き、「因縁即寂滅性。寂滅性則施四句超百非。故如來品以寂滅爲法身。又只丈六即是法身。(略)。涅槃云。吾今此身即是法身也。」(T42, 154b)と

説明する。このわが身がそのまま法身なのだと言うのである。それはつまり内応に法身としての属性を持たせているのである。また、このような考え方は吉蔵の独創というよりかは、三論教学の二諦の理解に基づいて導き出された理論であろうと考えられる。

最後に、吉蔵の『撰大乘論』の引用について述べると、平井俊榮博士による指摘の通り吉蔵は『法華玄論』において仏身論を著述するにあたって、浄影寺慧遠の仏身論を超越するため、慧遠が見ていなかった『撰大乘論』・『法華論』に基づきながら三論教学によって自己の仏身論を理論立てた。そして、その後撰論師との論争が始まると、撰論師の唱える法身の理論は超越的なものを立ててしまっている仏身論であるとして、『撰大乘論』を多く引用しながら、その理解の誤りであることを指摘したのである。

『十地経』における第九地の位置について

平賀 由美子

『十地経』の十地説を概観すると、まず初地の冒頭において諸の衆生たちに菩提へ向かう心が起こるとし、発菩提心の行為主体である諸の衆生たちと初地に住する菩薩との連続性が明確にされている。そして順次、初地より布施、持戒、忍辱、精進、禅定、智慧(般若)を各地において修め、いわゆる六波羅